

古典

第27・28回

随筆

枕草子

〈全六回の三、四〉

清少納言

すさまじきもの

学習のポイント

- 「すさまじ」の意味について
- 作者が列挙する「すさまじきもの」について
- 「除目」について

〈1〉

- 平安時代の地方官について
- 「何の前司にこそは」に表れる心情と、その場の空気
- 『枕草子』に用いられる形容詞・形容動詞

理解を深めるために

「すさまじきもの」はもともと長い章段で、今回は全文ではなくその一部を読んでいく。清少納言は冒頭に「昼間にほえる犬」「春になっても川に残っている網代」「三、四月の紅梅の衣」などを列挙し「すさまじ」と言っているが、それらに共通する独特のニュアンスをうまくつかみとってほしい。前回の「うつくしきもの」で学習したように、古語の「うつくし」の意味のひとつが、現代語では「かわいい」だったように、「すさまじ」も、ここでは現代とは違う意味で用いられている。私たちが普段使っている形容詞ではどんな言葉が当てはまるか、考えながら作品を見ていこう。

ほかに「枕草子」では、多様な形容詞、形容動詞が用いられている。いずれも清少納言ならではの美意識や、価値観、ものとのとらえ方を表しており、その奥深い言葉の世界を味わうのも「古典」を学ぶ魅力ではないだろうか。また、古語辞典でぜひ、興味を持った言葉は意味を調べてみてほしい。現在とまったく異なる意味で用いられる言葉や、現在は使われていない言葉もある一方で、今もほとんど意味が変わらない言葉もあることに気づくだろう。

さらにこの段では、平安時代の生活、社会の断片がかいま見られるのも、面白い。特に中心となる「除目に官得ぬ人の家」の精緻な描写では、どこか切なくなるような人間の姿にまで清少納言の筆は迫っていく。除目とは、官吏、役人の人事異動の行事のことである。ここでは「春の除目」といって、地方官（国司）の任免についての人事異動のことを指している。「除」は前任者を外し除いて、「目」は新任者の名を目録にするという意味。当時の人々にとって大きな関心を集めたこの行事で、国司への任官を待つ人の家の様子、期待した末に望みがかなわなかった人々の落胆ぶりなど周囲の人間模様が、臨場感たっぷりに活写されている。作者はどんな体験をもとに、そしてどんな思いを抱きながら、この「すさまじきもの」を書いたのか、思わず考えを巡らしてみたいくなる章段である。



講師  
桑原慶子

古典

第27・28回

このページの文書・画像の無断転載及び商用利用を固く禁じます。

枕草子 三、四

清少納言

講師・桑原慶子

すさまじきもの

すさまじきもの、昼ほゆる犬。春の網代。三、四月の紅梅の衣。牛死にたる牛飼ひ。乳児亡くなりたる産屋。

除目に司得ぬ人の家。今年はずと聞きて、はやうありし者どもの、ほかほかなりつる、田舎だちたる所に住む者どもなど、みな集まり来て、出で入る車の轆もひまなく見え、もの詣でする供に、我も我もと参りつかうまつり、もの食ひ、酒飲み、ののしり合へるに、果つる暁まで門たたく音もせず、あやしうなど、耳立てて聞けば、前駆追ふ声々などして、上達部など、みな出で給ひぬ。もの聞きに、宵より寒がりわななきをりける下衆男、いともの憂げに歩み来るを、見る者どもは、え問ひにだにも問はず。ほかより来たる者などぞ、「殿は、何にかならせ給ひたる。」など問ふに、いらへには、「何の前司にこそは。」などぞ、必ずいらふる。まことに頼みける者は、いと嘆かしと思へり。つとめてになりて、ひまなくをりつる者ども、一人、二人、すべり出でていぬ。古き者どもの、さもえ行き離るまじきは、来年の国々、手を折りてうち数へなどして、揺るぎありきたるも、いとほしう、すさまじげなり。

(第二十二段)

古典

第27・28回

このページの文書・画像の無断転載及び商用利用を固く禁じます。